

ブロー女史を憶ふにつけて

一

ブロー女史が先々月の末長逝せられたといふ報
(前號所報)は、私にいろいろのことを思はせた。

私はブロー女史とは面識も手紙の上の交際もない
たゞ其の著書を通じて知つて居るだけである。正

直にいへば、生前の女史に對しては、亞米利加に
於ける純正フレートベル主義派の一代表者として、
主として批評的に見て居たのであつた。數年前の
フレートベル會夏期講習會の時にも、私の立場とは
多少反對の側に居る人の一人として女史の名を舉
げたに過ぎなかつた。しかし、今や此の熱心なる
幼児教育界の耆宿を失へるに當つて、私はたゞ學
問的に批判的にのみ此の人を見て居るにたえなく
なつた。そして從來漠然と私の心の中に漂つて居
た女史に對する敬重の情は、今更の様に感ぜられ

倉橋惣三

て來た。私は、我が幼児教育の爲に、どんな少し
の熱心でも持つて呉れる人に對して、感謝とか尊
重とかいふ情を持つ。況んや此の偉大なる斯界の
貢獻者に對して、如何に多くの敬意を表すべきか
を知らないのである。

殊に私の何となく感ずる處では、或は此の人が
所謂純正フレートベル主義高唱者の最終の第一人者
ではあるまいかなぞとも思われるのである。勿論、
どこに隠れたる偉大な研究者が居るか分からな
い。又此の後とても、續々研究者は出るであらう。
しかし、種々なる幼児教育論の表に立つて、一方の
雄として、此の派の所論を信念的に且つ學問的に
高潮するの力と深みと博さとを有すること女史の
如きは今の時勢が多く生みそうにもない。私は所
謂純正フレートベル主義者の固執の中に賛成の表し

得ない點をも持つのであるが、また濫にフレーベルの主義を無視して其の深い大きい貴重さを知らない徒輩にも與し得ないのである。此の意味に於て、私は、幼兒教育の研究者として、どこ迄もフレーベルの研究者である。而して眞の理解と眞の批判との態度を以て、私のフレーベル研究に、最も有益な伴侶となつて呉れたものは、少くも其の一つはブロー女史の著書であつたのである。若し面晤する機會があつたならば、此の人にこそ随分思ひ切つた手答へのある議論を闘はし得ると思つたのであつた。そしてフレーベル研究に益する所最多かろうと思つて居たのであつた。私の狭い見聞では、幼稚園教育に關する研究書は、たゞ傳承的な註釋風なものか、然らずんば獨斷的な勝手放題のものが多い。結論や主張はとに角く、問題の取扱ひ法が研究的に、すなはち基礎の上に立つ批判を以てして居るものは極めて少ない。従つて人をして傾聽せしむるに足るものが極めて少な

い。ブロー女史の態度は、此點に於て恐らく最立派なるものであらう。殊に『幼稚園教育論叢』(International Issues in the Kindergarten) に於て、此の態度が美事に成功せられて居る。そして、批判的取扱ひをして居ながら、しかも、フレーベルの中心思想に向つて、常に深みのある、熱のある理解の態度を持せられて居る處に、私達はいろ／＼のことを學ぶのである。フレーベルは、其の最よき使徒を喪つたことを天にあつて惜んで居るであらう。

二

ブロー女史の著書は、全體の調子が學究的である。『母への手紙』(Letters to a Mother) の様な目的が極く通俗的なものに於ても、たゞ實用的といふよりは理論的である。主としてフレーベルの『母と子の遊戯』の解釋を説いた『象徴教育』(Symbolic Education) に於ては問題が問題だけに一層理論的になつて居る。前述の『幼稚園教育論叢』は殊にそ

うである。又亞米利加の幼稚園協會から出版して居る幼稚園研究の報告『幼稚園』(The Kindergarten, Reports the Committee of Nineteen on the Theory and Practice of the Kindergarten)の中のブロー女史受持の報告でも、他の委員の報告に比して、著しく理論的である。而して、元來が哲學的な要素の多いフレーベルの思想を理論的に解釋するとなれば、自然に哲學的な調子のものになる。そこで、多少難解な傾向を生ずる。殊に幼児教育の問題といへば、頭からたはいない事、淺いこと、軽いことに考へて居る人達には、恐ろしく六かしいものに思はれる。一體フレーベルの著書がどうである。何も特別難解な書物といふではなく(分り易い書物ではない)此位の難解さの本はいくらもあるのであるが、問題が幼児教育のこと、いふので、讀者が豫め氣樂な心持で讀みかゝる爲に、まごつくこと甚しいのである。そして、もつと『大問題』ならば六かしいのも已むを得ないが、高が幼児教育

の問題でこんな六かしいことは言はなくてもよからう、といった風な感を持つのである。併し、幼児教育の問題は、所謂『子供の心』だからとて、そんなたはいない事、淺いこと、軽いことではない。ブロー女史が、常に非常に大きな見地から幼児教育のことを考へて居ることは、そのこと自身大に教へられることである。

ブロー女史を懷ふて此點に至る時に、私の心の中に、我國幼稚園教育界の現状が反對聯合の法則を以て、あり／＼と浮んで來るのである。すなはち、我國の幼稚園界の現状は、ブロー女史が幼稚園に對する態度とは、甚だ反對なる態度をあらはして居る。直言すれば、我國現在の幼稚園界は、幼児教育といふことを考へるのに、極めて淺く軽く淡い。換言すれば根底となり根據となる哲學がない。之れは我國の教育界全體を通じてのことかも知れないが、幼稚園教育に於て殊にそうである子供は愛して居るに相違ない。保育の必要は分つ

て居ないではない。保育の方法については研究せられて居る。殊に日々のことには最熱心である。しかし、それだけでは足りない。

私は我幼稚園教育界に、明確な人生觀を持し、遠大な人生の理想を持ち、又自らこういふことに充分努力して居る人が、決して少くないこと、思ふ。しかし、中には随分こういふことに呑氣な人もありはすまいか。素よりもは程度問題であるから、其の程度は種々であるに相違ないが、こんなことは、幼兒教育者としては、(幼兒教育者なるが故に) どうでもよいこと、呑氣に構へて居る人はありはすまいか。私はよく聞くことがある。私は子供の遊び相手なのですからと。之れは假令謙遜の言辭としても、自ら愚にし過ぎた言ひ方である。又聞くことがある。幼兒相手ですから理窟も何もありません。氣樂なものですと。之れは通人的なさばけた物の言ひ方かもしれないが、聞くものには誤解され易い。若しそれ自らこんな軽い

心持ちで居るのならば、それは幼兒教育を侮るものと云つてよい。兎に角くに、ブロー女史の幼稚園觀などを一方に置いて見ると、我國幼稚園界の此の現狀が對比的に深く感じられて來るのである。ブロー女史を懷ふにつけて私の今最も著しく感じて居ることは此のことである。

三

幼稚園教育は其の對象から言つても、仕事の形式から言つても、教育の中の小さい部分である。しかし、此の小さい部分を正しく理解する爲には教育全體の大きい根本的意義から考へられなければ分るものではない。又教育の根本的意義を考へるには人生そのもの、考へ方から考へられなければならないものではない。而して人生そのもの、考へ方には、時代々々のいろ／＼な思潮や學問が大きな影響を及ぼして來る。すなはち、我々の幼稚園教育の研究は當然茲まで溯るのである。ブロー女史は『幼稚園教育論叢』の序に、最近三十年間に於

いて、幼稚園より大學に至る總ての教育過程は、其の宇宙觀、心理學說、社會生活によつて大に影響せられて居る。此の著の第一の目的は其の影響が幼稚園の上に及ぼせる結果を考究して見度いのであると言つて居る。如何に其の考察の仕方の大きいかを見るべきである。そして總ての問題が、皆それだけの哲學的基礎の上に論究せられて居る。或は理想主義を説き、自然主義を評し、プラグマチズムを論じて居る。殊に同書の最後の章の『三種の世界觀』の如きは、普通の淺見者流には幼稚園教育論中の一章とは思ひもかけぬ様に見えそうなのである。少くも多少なり哲學上の基礎知識がなくては、一寸分り難い。普通の教育書や教育論が、たゞ實際的に、たゞ方法的にのみ教育の問題を取扱つて居るのとは、大に其の趣を異にする。私は今こゝにブロー女史の論の内容を一々紹介しようとはしない。しかし、こゝいふ風に大きい見地から幼稚園の問題を考へること、或は寧ろ、幼稚園教

育の問題を充分正しく理解し得るために、其の實際問題、方法問題の他に、根本問題を始終研究せらるゝことを、我國の幼兒教育界に切に促し度いと思ふのである。

小さな井戸でも、それが眞に盡きない井戸であるためには、地下の眞源に達しなければならぬ。而して井戸そのものは小さなものでも、其の連つて居る處は大きな地下の水脈である。此の水脈を知ることなくして、井戸を解することは出来ない。幼稚園も其の通りである、一寸のぞいただけでは小さな淺いものである。しかし、眞源たる水脈はどこ迄廣いもの、どこまで深いものか分らない。而して、其の水脈を離れた井戸は涸れ井戸である。但し私はブロー女史の研究態度を賞揚することによつて、我國の幼稚園の考へ方も其の通りでなければならぬといふのではない。如何なる基礎の上に我國の幼稚園を建設するかといふことは、我々が自ら考へなければならぬ。決して他人の

説に其のまゝに従ふことはない。しかし、其の態度は、ブロー女史の執つて居る態度の様に、どこ迄も人生の大局から幼稚園を考察してゆくのでな

くではないといふのである。之れブロー女史の長逝の報を聞くと共に、女史を懐ふにつけて切に感じたのである。

お 話 の 仕 方

(Shelllock: "The art of Story-Telling" による)

紹 介 子

五、具備したき要素

フレデリック、ハリソンといふ人が「書物の選擇」といふ本の中で次のやうなことを言つて居ります。

讀書に際して最も有益な助けとなることは何

を読むべからざるかといふことを知ることであ

る……知識の茂林の中で、實るべき認識の整頓

せる小區域とも稱すべき僅かばかりの清められ

た場所へ、何を入れてはならぬかといふことを

知ることである。

さて私は前章に於て實ることのない雜草をこの「整頓せる小區域」に生せしめないやうにしなればならぬといふことをお話いたしました。私はこれからこの茂林を開拓して作つた小區域に如何なる種子を下ろすべきであるかといふことに就てお話いたしました。

茲で一寸おことわりして置くのは前章「避けたき要素」中に於てもお話いたしましたやうに私の對象として居るのは通常の發達を成しつゝある兒童なのであります。それ故私の今言はんとするお話なるものもあらゆる兒童の望むお話を包括して居